

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 小林 善帆

論 文 題 目

帝国支配といけ花

論文審査担当者

主査 名古屋大学 准教授 日比 嘉高
委員 名古屋大学 教授 飯田 祐子
委員 名古屋大学 教授 池内 敏
委員 国際日本文化研究センター 教授 松田利彦

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、近代日本の帝国支配のありさまを、内地および外地におけるいけ花の広がり、とりわけその女子教育との関係について、横断的に考察を行ったものである。

本論文は、第Ⅰ部と第Ⅱ部の2部構成となっている。第Ⅰ部では、男性から女性へといういけ花の担い手の変化に着目しつつ、いけ花の様式の通時的な変遷を記述している。第1章では、中世におけるたて花のいけ花としての成立から、近世における立花様式の確立を経て、生花様式の成立までを記述した。第2章では、西洋文化流入とともに「いけ花」を置く室内空間や場所、花材が変化して行き、明治中後期から盛花様式が生み出され流行していったことを、戦後の様相まで射程に入れつつ叙述した。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部のいけ花史研究の成果を踏まえ、帝国日本におけるいけ花を考えている。第3章では、近代における内地の高等女学校のいけ花・茶の湯・礼儀作法に関する教育のありさまを、1870年～1877年の間に開校したキリスト教主義の女学校を例にとりつつ考察した。

第4章では、植民地台湾の女学校・高等女学校における日本の礼儀作法の教授のありさまを調査分析した。日本人、台湾人それぞれの高等女学校における礼儀作法ならびに作法室のありよう、いけ花・茶の湯の取入れのようすについて明らかにした。

第5章では、第1節で植民地朝鮮の女学校・高等女学校におけるいけ花・茶の湯・礼儀作法の教育に関して、日本人を主とした高等女学校、朝鮮人を対象とした公立の女学校・高等女学校、朝鮮人を対象とした私立女学校・高等女学校、内鮮共学の高等女学校に分類し、考察した。次に第2節において、朝鮮戦争後、韓国人女性たちによって広められたコッコジ（韓国いけ花）に注目した。コッコジの教授者2人の履歴や考え方を、解放前の支配文化である日本文化との関連に留意しながら分析した。

第6章では、満洲におけるいけ花・茶の湯・礼儀作法を取り上げた。第1節では満洲都市部における日本人の日常生活を考察の対象とし、講習会、花展、ラジオ放送、家元の渡満といった活動を調査した。第2節は、女性文化誌『女性満洲』に掲載されたいけ花関連の記事を分析した。また満洲・中国における華道家草月流勅使河原蒼風の活動を調査考察した。第3節では、文化総合雑誌『芸文』に掲載された、いけ花をモチーフにした北村謙次郎の小説「東北」を分析し、満洲において日本人女性として生きることの揺れを描く際に、いけ花がモチーフとして使われていることを指摘した。第4節は、満洲における女学校・高等女学校におけるいけ花・茶の湯・礼儀作法について調査分析し、内地同様、課外でいけ花などが教えられたことや、作法室の設置のありかたについて明らかにした。

第7章では、サイパンのサイパン高等女学校とその設立にあたって尽力した南洋寺の僧侶青柳貫孝に注目しながら、いけ花・茶の湯・礼儀作法の受容、日本人としての生活空間のあり方や現地民族への教育について考察した。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

いけ花の歴史に関する研究は、その前近代における展開について歴史学や美術史の観点から考察がなされてきた。本論文の執筆者小林氏も著書『「花」の成立と展開』において、中世以降のいけ花史を叙述している。しかしながら、近代に関してはほとんど研究がなく、まして外地におけるその展開についてはこれまでまったく考究されることがなかった。本論文は、近代におけるいけ花の歴史を叙述した初めての本格的な学術論文であると同時に、内地と外地の両方を視野に入れた帝国の文化史としてのいけ花史を提示する、大きな射程の研究成果である。

本論文の評価される点は、次の四点にまとめられる。第一に、帝国日本の支配域であった台湾、朝鮮半島、旧満州、南洋（サイパン）の各地を横断的に見渡した俯瞰性であり、内地を扱う際にもキリスト教学校を取り上げた着眼点である。本論文は、女子の学校教育の調査を主軸にしなが、各地域におけるいけ花や茶の湯の教授・実践のあり方を具体的かつ詳細に明らかにし、その共通性と差異を指摘している。個別の地域研究に分化しがちな植民地研究のなかにあつて、幅広い展望を示した論考だと評価できる。第二点として、いけ花という、決して主流ではないが時に日本文化の中心的イメージを担い、男性から女性へとその担い手が変化するなど社会的性差に関する分析の観点から見ても興味深い対象を選んで考察した点が挙げられる。近年、能や歌舞伎などの伝統的芸能文化に注目した植民地研究も始まっているが、そうした学会の動向とも通じる主題である。第三に、資料の発掘という点からも高く評価できる。本論文には参考論文として『植民地期朝鮮の教育資料』Ⅰ・Ⅱが付されているが、そこに収められた植民地期の同窓会誌や蔵書調査報告などは資料的価値も高く、関連する研究者から今後利用が見込まれるものである。また台湾、朝鮮半島、旧満州、サイパンそれぞれにおいて複数回聞き取り調査を行っており、オーラル史料を積極的に収集した点も評価できる。第四に、戦前の帝国期に重心を置きながらも、本論文の考察が戦後における日本的文化の相続と反発のダイナミズムにまで切り込んでいるところも注目すべき達成があるといえよう。韓国で生まれ成長したコッコジ（韓国いけ花）を素材にして、日本の帝国支配がもたらした文化に対する韓国人の距離の取り方の揺れに注目したことは、本書の考察の射程をさらに押しひろげたものであった。

もちろん瑕疵がないわけではない。女子高等教育の実態を連続的に描出していく記述は、やや平板に流れている。また考察中で用いられる「日本人」の「アイデンティティ」という概念については複数の審査委員からそのあいまいさが指摘された。とはいえ、いずれも本論文の価値を損なうものではなく、上述した本研究の達成は揺るがない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。